

訪 問 国：オーストリア

研修テーマ：言語力・コミュニケーション力の育成

所属名 千葉市立高浜第一小学校

氏 名 岡 田 美 穂 子

1 はじめに

平成 26 年 10 月 27 日から 11 月 7 日までの 12 日間、千葉市教員等海外派遣研修事業（独立行政法人教員研修センター教育課題研修指導者海外派遣プログラム）の研修生としてオーストリア共和国を訪問させていただいた。

オーストリアにおける言語力・コミュニケーション力の育成のための取組を視察し、成果と課題を把握することによって、千葉市の学校教育課題である「外国語を通じて言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成」のための手立てを探りたいと考えた。

2 オーストリアの教育状況（教育制度）

オーストリアの義務教育は、1774 年にマリア・テレジアが「6 才の子供から就学を」と唱えたことに始まり、現在は、1962 年に制定された学校教育法に基づいている。大まかな内容は国が制定するが、細かい運営に関しては、州が法律で定めている。1975 年から全ての学校が男女共学となり、義務教育は、幼・小・中の 9 年間無償で行われる。

オーストリアでは、小学校段階であるフォルクスシューレを 4 年間、中学校段階を 4 年間という教育制度になっている。これ以降の学年では、職業教育高等学校や大学進学をめざす高等学校へ進学する。中学校は、職業技術を育成するハープトゥシューレと大学進学をめざすギムナジウムとその中間のノイエミッテルシューレに分かれているが、近年、10 才で進路を決めるのは早すぎるという考え方が広まり、2015 年よりハープトゥシューレはノイエミッテルシューレにかわることになった。これにより、高校への選択肢の幅が広がることとなる。

また、EU 圏内では、各国における評価の差をなくし、教育のスタンダード化を図ってこうとする動きがある。そこで、各国ともに共通する高校卒業試験であるマトゥーラを B I F I E（文部省の一部から独立して作られた機関）で作成している。B I F I E のテストは、EU 圏内で標準化された統一問題で行われる。例えば、英語の成績は、ヨーロッパ言語共通参照枠組評価（C E F R）に照らして A 1 ～ C 2 の 6 段階に分けられる。基準に達していれば B 2 の評価になり、これは全ヨーロッパに共通する評価で、大学進学への指針となっている。

他にも、B I S T A（教育スタンダード、国際比較調査担当部門）により、4 年生と 8 年生における統一のテストを全校に義務付け、教育の標準化を図ったり、幼稚園教育の充実に努めたりしている。

3 学校訪問をして

（1）ギムナジウム・サクレクール

オーストリアの学校はほとんど公立だが、ここは私立のカトリック系の中高一貫校である。カトリックの教えを基準にカリキュラムを組んでいる。

授業内容の特徴としては、一つ目に、言語に重点を置いているということである。外国語の必修科目は、英語・ラテン語・フランス語で、選択科目は、ロシア語・中国語である。言語を重視しているので、特別編制クラスが組まれており、教科によっては授業の半分をドイツ語で、半分を英語で行う場合もある。2 カ国語で教わることにより、脳が活性化され数学などでも高い成果を上げている。

二つ目は、自然科学に力を入れている点である。子供たちが興味をもったことについて自然

科学のラボで実験を試みることができ、生徒は科学のオリンピックやコンペで優秀な賞をもらう実績を上げている。

本校は、ウィーンの中でも一番国際的で、45カ国籍の生徒が通っている。1クラスにすると10～15人がドイツ語を母語としておらず、自然と子供たち同士が交じり合い多様性が生まれている。一緒に生活していく中で、国際性が育まれ、宗教や他国についての異文化理解がなされている。

こちらでのコミュニケーション力とは、母語をドイツ語としない子供たちとかかわりのことをいい、授業においても、コミュニケーションを重視した教育がなされている。以前は、対面式教育で授業が行われていたが、今は対話することを奨励している。カリキュラムをこなすだけでなく、いかに応用していくかを学ばせることにより、応用力を培い、コミュニケーション力（言語面）も強化されていった。子供たち同士や子供と教師が対話する双方向のやりとりを重視していくことで、言語力も向上していった。

（2）ギムナジウム・フロリドスドルフ

本校は、11歳からの子供が才能を伸ばすために通ってくる公立のギムナジウム(生徒数 1,200～1,300人、47クラス、教職員 130人)という学校である。中学校は25人、高校は30人が1クラスの上限で、1時間の授業時間は50分であり、50%以上が大学へ進学している。言葉や経済、自然科学に重きをおくが、運動系の高校への進学や芸術面・創造面での選択の可能性を広げるなど、人として立派に生きていける人間形成を重視している。

ランゲージ・ラボと呼ばれるコンピュータールームが2つあり、教室での英語やフランス語等の授業や特別教室での生物・物理等の学習のために220台のパソコンを活用している。

英語の授業では、ネイティブスピーカーがヘッドホンを使用して生徒と直接話したり、学年が上がるにつれ、物理の授業を英語で進めたりしている。また、ドイツ語を母語としない子供

も多数おり、課外授業を行う中で、発表する機会を多くすることで、ドイツ語も上達し、自信をもってプレゼンできるような力が身に付いてくる。



【ランゲージ・ラボでの様子】

4 研修成果の活用

オーストリアでは、教師の工夫や適切な支援により、各教科において様々な授業形態で学習を進めているので、子供たちはどの場面でも生き生きと自ら学び、表現していた。

オーストリアでのコミュニケーションとは、ドイツ語を母語としない子供たちとの関わりをことをさし、近年の移民の増加により第1外国語である英語でコミュニケーションを取ることに重点が置かれていた。

日本においても同様に、外国語によるコミュニケーション力の育成が求められている。今後、小学校中学年から始まる外国語活動に向け、授業形態を工夫したり教材教具を開発したりして研修で学んだ人対人の関わりを基盤とした外国語によるコミュニケーション力の育成に力を入れていく必要がある。

また、本校のように外国籍児童の多い学校では、少人数による日本語指導の充実を図るとともに、各教科等や学校行事、日常生活の中で二か国語を話せる子供が間に入ってかわることで、言語力を高め、コミュニケーション力を育てている。子供同士の信頼関係を深めながら、異文化を理解していくことが、重要であると考ええる。今回の研修の成果を今後の教育に生かしていきたい。

訪 問 国：ドイツ

研修テーマ：言語力・コミュニケーション力の育成

所属名 千葉市立都賀小学校

氏 名 上 野 仁 子

1 はじめに

平成 26 年 11 月 17 日から 28 日までの 12 日間、千葉市教員等海外派遣研修事業（独立行政法人教員研修センター教育課題研修指導者海外派遣プログラム）の研修者として、ドイツ連邦共和国を訪問させていただいた。

ドイツは 16 の州からなる連邦国家で、人口約 8090 万人、そしてアメリカ合衆国に次ぐ世界第 2 位の移民国である。このように多民族が混在するドイツにおいて、言語力・コミュニケーション力の育成に対する取り組みがどのように行われているのかを視察し、その成果と課題を把握することで、千葉市の今後の教育活動のより良い実践につなげていきたいと考えた。

2 ドイツの教育状況（教育制度等）

ドイツの教育制度は各州独自で、定期的に、各州の文部大臣会議（KMK）が行われ、情報交換のもと、各州ごとに具体的な教育制度や教育方針を定め、州の実態に応じた学習指導が行われている。

2000 年の PISA テストの結果不振から、国の教育制度を見直し国全体で大規模な教育改革を行い、現在においても各州ごとに試行錯誤しているところである。

今回の研修では、ハンブルグ市とブレーメン市を訪問し、それぞれの教育制度と改革の取り組みについて視察させていただいた。

（1）ハンブルグ市

2000 年の PISA ショック以降、学校の形態を変え、現在、就学前のキンダーガーデン（フォーシューレ）、初等教育過程にあたるグルントシューレ、そしてその後は、シュタットシューレか、ギムナジウムに進学する。どちらも日本の中等・高等教育課程にあたるが、シュタットシューレは、9 年生ないし 10 年生で卒業し就職

するか、13 年生でアビトゥーア受験資格を取得し大学に進む。ギムナジウムは早い速度で学習が進み、12 年生でアビトゥーア受験資格を取得する。

（2）ブレーメン市

ハンブルグ市同様、2000 年以降教育制度の改革が行われ、現在は、グルントシューレの後は、オーバーシューレかギムナジウムに進学する。オーバーシューレは、従来の基幹学校と実科学校を統合した形の学校である。10 年生で卒業後就職するか、13 年生まで通い、アビトゥーア受験資格を取得する。または、ギムナジウム同様 12 年でアビトゥーア受験資格を取得するために 9 年生終了時、上級学校に移行することもできる。現在、ブレーメン市では 75%の生徒がオーバーシューレに通っている。

3 学校訪問をして

（1）ギムナジウム・クロスター・シューレ

①落第ではなく、支援を

学力不振の生徒を落第させる制度を数年前から廃止し、特別な支援体制のもと学習をサポートしている。5,6,7 年生については、通常の授業の時に取り出して個別支援を行っている。8 年生以上は、毎週水曜日に支援クラスのための特別カリキュラムを作り、そこで支援をしている。支援クラスの指導者は、行政からの特別予算で学校の OB や教職員退職者を雇用している。指導者 1 名に対して生徒は最大 10 名までとし、現在は平均 1 : 5 で行っている。移民率 35～45%ということもあり、ドイツ語の特別支援を要する生徒が多いが、学習意欲は高いそうである。

②深く考えることを通して学ぶ取組

年 2 回、10 日間のプロジェクト週間を設け生徒が自らテーマを決め、主体的にテーマ追求

のための学習を行う。そして、発表会では保護者も参観のもと、その成果を発表する。内容は、芸術・自然・政治等、多岐にわたり、発表方法もプレゼンや劇等、多種多様である。テーマ追求の過程の中で、生徒たちは自ら調べ、他者と関わりあうことで、互いの考えを深めたり、コミュニケーション力を高めたりしている。

個人の自立性が高く、他者と自分は異なるという考えが前提となる国民性の中で、コラボレーション重視の活動を通して、互いの意見を交換し合い、テーマに沿った納得解を導いていく。

参観させていただいた、9年生の演劇では、生徒一人一人が、自分の役柄について自分なりの解釈をもち、活発な意見交換を行いながら、練習に励んでいた。



【プロジェクト学習で、演劇練習に取り組んでいる様子】

(2) グルントシュレー・アウフ・デン・ホイエン校

①異学年交流によるコミュニケーション力の育成

11年前より、1～3年生は、各学年を混在して学級編成を行っており、4年生だけが1学年で学級を編成している。その効果としては、児童の教え合いが自然に生まれ、コミュニケーション力を高めている。また、その学年の学習は遅れがちでも、下級生の面倒を見ることで自己肯定感も培われている。

自立学習を確保するための自学教材も充実しており、一斉授業はあまりなく、児童達は自分の学力に合った学習を行っている。評価は、自立学習チェック表を各自が持っており、自己評

価を常に行っている。

近年ではメディア機器も少しずつ充実してきて、それらを活用した言語教育にも力を入れているそうである。



【PC教材でドイツ語の学習に取り組んでいる様子】

②様々な支援体制の取組

多様な言語環境や家庭環境を持つ児童の指導にあたり、教師はチームを組んで指導に当たっている。そのチームは、担任、ソーシャルワーカー、特別支援担当教員等で構成されている。

おやつの中には地域の方から差し入れられた野菜や果物を児童自らが切ったり配ったりしており、地域とも密着した学校である様子がうかがえた。

4 研修成果の活用

(1) 日本語以外の母国語を持つ児童・生徒の支援体制について

- ・本市では近年、外国人生徒が増加傾向にあり、日本語が理解できずに授業についていけない児童生徒の支援が急務となっている。今年度より外国人生徒のための日本語指導通級教室を開設した。このような支援体制を充実させていく上で、ドイツで取り組んでいたチーム体制による指導、外部人材の活用等は、今後本市においても参考になると考える。

(2) 異学年交流・コラボレーション的活動の充実について

- ・児童生徒が自己肯定感を育み、意欲的に学習に取り組むために、日々の学習の中に上記のような活動を積極的に取り入れていくことは、重要だと考える。